フィリピン人津波被災者ビデオインタビュー

東日本大震災の経験を世界の人々と共有するために

災害リスク研究ユニット　総括主任研究員　井上　公

はじめに

東日本大震災から２ヶ月後に私は東北地方の被災地調査の合間を縫って、かねてから共同研究を実施しているフィリピン火山地震研究所（PHIVOLCS）を訪ねました。フィリピンも津波災害の多い国なので、研究者達は日本での被害調査を希望していました。いつごろどんな調査をすべきか検討しているうちに、被災者の中にはフィリピンの人もいるはずだからその人たちにタガログ語でビデオインタビューをして、母国の人たちに津波の体験を伝えてもらおうということになりました。同時にフィリピンの研究者達に被害の全体像を知ってもらうために、２名づつ７班に分かれて来日し各地を調査する計画を立てました。日本側は私と今井研究員で主に対応しました。

インタビューの実行

被災者２－30人へのインタビューを目標にして事前にアポを取ろうとしましたが、はじめはなかなか被災者にたどりつけませんでした。最初は陸前高田市で日本語教室の先生をなさっている方を通じてフィリピン人被災者の方にコンタクトができ、６月下旬にインタビューを実施しました。陸前高田は南三陸と並んで三陸で最も被害が激甚だった土地のひとつです。M・Sさんという地域のまとめ役の方の避難先のお宅にお邪魔すると、被災した市内在住のフィリピン人の方が６人も集まってくれていました。皆さん日本人と結婚された女性で多くの人が10年以上日本に住んでおり日本語も達者です。その中で同市気仙町のH・Kさんのビデオインタビューの一部を以下に紹介します。タガログ語をあとで日本語に翻訳したものです。

H・Kさんの証言

『あの時、夫と二人で家にいたんです。95歳の姑も一緒でした。強い地震が来たので、私はオトウサンに子供たちを迎えに行きましょうと言うと、彼は大丈夫だよと言いました。まだそんなに揺れは強くなかったんです。でもあまりにも強くなってきたので、私たちはオバアチャンを連れて家の外に出たんです。姑は95歳なのであまり動けません。それで地震の後、彼女を抱き上げて車に乗せました。それから夫と私で別々に子供を迎えに行ったんです。私は末っ子を迎えに行き、夫は小学校に行きました。子供たちを引き取ってからまっすぐ、家から15分ぐらいのところにある義理の姉の家に行きました。着いて５分も経たないうちに私は津波が来るのを窓から目ました。私は「ハヤク･ニゲロ、ハヤク・ニゲロ」と叫びました。私はまず二人の子供を確認しました。私は末っ子を抱き上げたのですが、夫はというと走り出そうとしません。義理の姉と兄、オバアチャンを置き去りにしたくなかったんです。４人が家にまだ残っていました。そのあと本当にあの津波を見た私は

写真１　陸前高田市気仙町でのインタビュー

走り出しました。二人の子供を連れて、子供を抱いて走ったのです。それもハイヒールで。でも私の夫は走れません。だって姑を置いて行けないからです。でもあんなに速い津波から逃げる事なんて本当にできません。でもとにかく私たちは走りました。私はしゃくり上げていました。もう死ぬと思って。あの津波を見たら本当に人間なんて生きのびることなんてできない...。あまりにも何て言うか、家なんかまるで紙切れのように、こんなになって（ジェスチャー）しまうんです。私たちは走りに走りました。それから泣きに泣きました。もう死ぬと思ったからです。それから１時間後には、私の夫なんかまるでサバイバーですよ本当に。だって学校の近くまで来た時に泥から這いあがって来て、叫んでいるんです。「ジョンピーはいるか？」って。私たちは体中泥だらけで目だけ白い色して出ているだけだったので、お互いに相手が分かりません。彼が子供の名前を叫んだので「私の夫だ」と分かったのです。私たちは抱き合いました。彼が生きているとは思ってもいなかったからです。彼は最初は母親を離さなかったんです。母親の服をこうしてずっと掴んでいたんです。でも彼は手を離してしまったんです。もし彼が手を離していなかったら彼も溺れていたでしょう。彼は木に掴まっていました。津波が去ってから彼は泥から這い上がってきたんです。結局３人が連れ去られました。義理の姉と兄の夫婦、そしてオバアチャン。２日後に義理の姉と兄の遺体が見つかり、その３日後にオバアチャンの遺体が収容されました。』

インタビューを終えて

各県の国際交流協会、カトリック教会などのご協力で、約２ヶ月間かかって北は岩手県久慈市から南は福島県いわき市まで最終的に目標を上回る53人の被災者に聞き取りをすることができました。インタビュー中は私達はタガログ語がわからないので日本語で聞き直したいのを我慢する毎日でしたが、後で日本語に訳されたものを読んであらためて、極めて生々しい貴重な体験談が沢山集められていることが実感できました。また皆さん母国の人々に対して津波への備えを怠らないことを訴えておられました。今回の震災では２万人近い方が亡くなりました。つまり危うく難を逃れたこのような貴重な体験を語ることのできる方は数万人に上るということです。我々はフィリピン人の方々だけをインタビューの対象にしましたが、将来の津波災害による犠牲者を減らすためには時間はかかってもいいので、全ての被災者の体験談を後世に語り継ぐための努力をする必要があると思います。ビデオ、インターネット、GPS など現代の技術がその助けとなります。

今回集まったフィリピン人被災者のビデオインタビューは現在 PHIVOLCS で英語の字幕をつけて DVD に編集する作業が行われています。日本語訳も進めています。さらに全証言を集めたビデオのアーカイブの製作、書籍の出版、マンガ版の製作などを計画しています。これらの資料をフィリピン・日本をはじめとする世界各国の津波防災教育に活用したいと考えています。